

唐丹希望基金「あの日 あの時」

[6] 「あいうえお運動」 と 「鎮魂と平和の笛壺 ハソウ」

唐丹希望基金の二つの願い：<http://eec-2020.com/tushin/eec/104tushin.pdf>

唐丹希望基金代表 高館 千枝子

「鎮魂の歌 巡礼の旅」は“未来を生きる唐丹の子供たちへ唐丹希望基金から伝えたい想い”が生まれた旅でもありました。「唐丹希望基金」の初めの一步は、一年間の教育支援募金で出発しました。

それが、9年間の支援活動の道を選んだ時、私たちに「共に生きる社会の実現のために、どのような姿勢であらねばならないか…？」が問われ始めました。初めに計画した1年だけの「募金活動」であったなら、役目を果たし終えた安堵感に満足し、深い交流も生まれることもなく、あっさり終わっていたと思います。「教育支援活動9年の決断」は、唐丹希望基金の姿勢の如何で存続の有無が決まることを自覚しました。私たちは、経済的支援の他に、精神的な支援も行い「子供たちの未来が、世界の平和を願う、真に豊かな人生であってほしい」と願い続けました。そのためには、支援者の生きる姿勢がとても重要でした。

誰しも自分の生き方を、常に考え、迷い、自問自答を繰り返しながら、自分が求める最良の道を選択して生きていくものですが、東日本大震災が起きたことによって、これまであまり必要とされなかった「共生・共存社会」「ボランティア精神」が社会全体に広まり出しました。未曾有の震災を目の当たりにし「被災者の力にならなければ…そのために何かしなければ…」と、共生・共存の心が芽生え、多くの人々が東北に寄り添う様々な行動を起こしました。私もその一人です。なかなか進まない復興のもどかしさや苛立ちを政治や行政にぶつけながらも、唐丹希望基金が存続できた一番の力は、真心のこもった唐丹から届く手紙でした。2011年5月に初めて届いた当時1年生15名の手紙、唐丹サンタルチア際の全児童、生徒104名（現在は76名に減少）の感謝の手紙、毎年の支援金に対する父母の手紙は唐丹希望基金を支える大きな力になりました。年を重ねるごとに深まっていく信頼、友情、絆の中から“二つの想い”が生まれ、私もこの想いと共に唐丹の子供たちと一緒に成長していきたいと願うようになったことは、ごく自然なことでした。

唐丹希望基金「愛のあいうえお運動」

世の中に大きく愛を広げる運動
子どもたち皆に生きる力！運動
震災を忘れない歌を広げる運動
笑顔でつながる縁を深める運動
世界へ、後世へ恩送りする運動
鎮魂と平和の思いをハソウに託す運動

(提唱：唐丹希望基金副代表 堀泰雄)

 唐丹の海から世界へ：https://www.youtube.com/watch?v=oCf_c7okiQU

「唐丹希望基金」が真に目指すもの、それは、子供達へ引き継ぐべき価値ある社会「善循環社会」です。

この社会の実現を目指し、「唐丹希望基金」から生まれた渾身の想いを貫いて生きる事です。

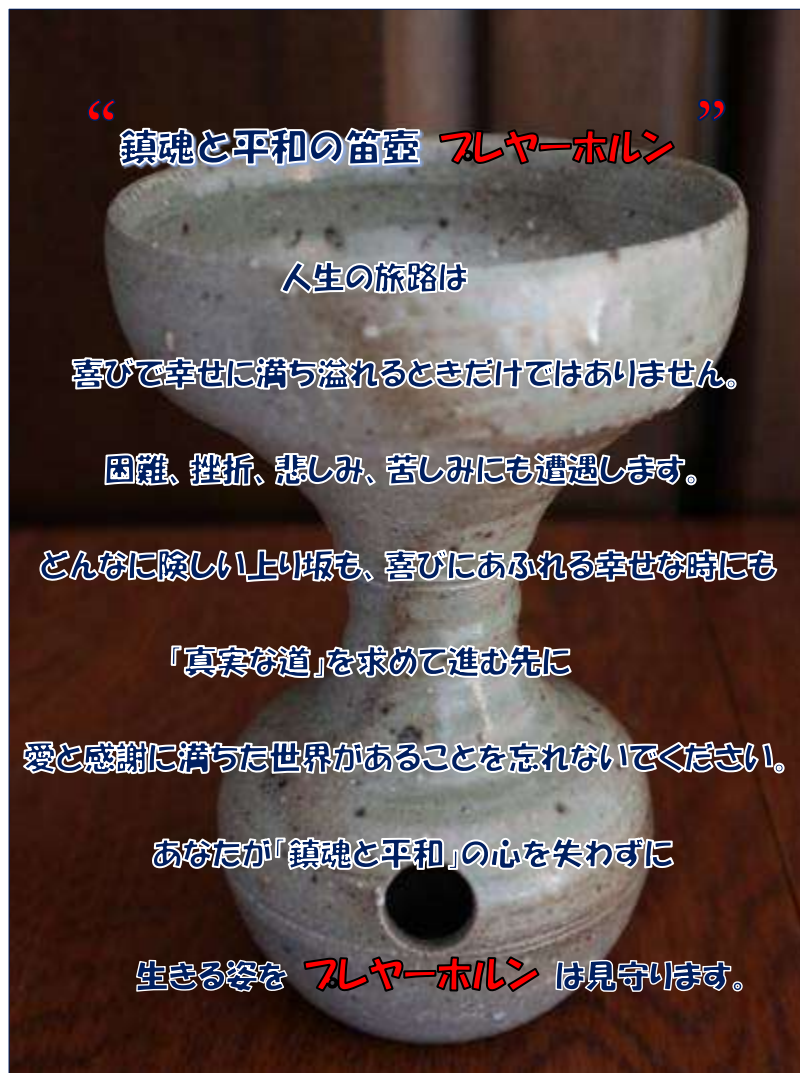


「鎮魂と平和の笛壺 プレイヤーホルン」 — ハソウは**プレイヤーホルン**となって世界へ —

🎵 備前交流「鎮魂の歌」:<https://www.youtube.com/watch?v=EgR04TMw8S0&feature=youtu.be>



「鎮魂と平和の笛壺 ハソウ」は「ハソウを愛する会」会長 坂口宗憲（憲一郎）さんが、東日本大震災被災者に寄り添う慰問の旅（岩手県大船渡市）「津波犠牲者の慰霊コンサート」でハソウを吹いた事が縁で唐丹希望基金に紹介していただきました。それ以来、坂口さんは「鎮魂の歌 巡礼の旅」の先々でハソウを吹き続けました。2016年9月「ハソウプロジェクト」の結成を機に、「ハソウを愛する会」では、日本とアメリカを合わせ71名に「ハソウ継承認定証書」を授与し、ハソウは「**鎮魂と平和の想いを込めたプレイヤーホルン**」となって世界へ飛び立ちました。唐丹希望基金から生まれた**二つの想い**を**プレイヤーホルン**に託し、2018年3月から唐丹中学校卒業生に贈っています。（2022年3月卒業生まで）



— プレイヤーホルンのメッセージ —

※ハソウの [購入方法]: <http://eec-2020.com/daihyo/sakaguchi/minihasou.pdf>

購入者に「プレイヤーホルンのメッセージカード」を添えます。